

米の知識とたき方 たべ方 (第 10 回) (新しき世界へ 1970 年 9 月号)

米の知識(その十)

| | | | |
|-----------|--------|--------|--------|
| 台湾より移入量 | 四、九七〇 | 四、五〇〇 | 四、五〇〇 |
| 其他と共に輸移入計 | 一五、二七一 | | |
| △需要 | | | |
| 輸移出 | 五八七 | | |
| 消費 | 八〇、〇二二 | 八〇、一五〇 | 八〇、〇〇〇 |
| 繰越額 | 八、四九三 | 三、一六二不 | 七、六六八 |

十一月一日から始まるという次年度の推定不足量七百六十六万八千石を充たし、その翌年度への持越高を産み出すのがこれからの米の対策の眼目であるが、それまでの間において起り得べき配給の故障を円滑ならしめるについても亦同時に遺憾のない方法を講じなければならぬ。

不足七百六十六万石は七分づきによるつき減り減と、酒米の半減と、さらに節米によってどうにか償い得るかも知れぬ。この上明年夏に出廻る十五年度台湾第一期作米の増産と麦類の大々的増産とその食用への奨励とに成功すれば、翌年への持越となるべき幾らかの米を産み出す可能性は僅かながら生じてくる。明年の作柄が内地外地を通じて豊作であればこれら姑息な対策でもどうにか凌げるであろう。しかし反対に、もし明年の作柄が平年作またはそれ以下であれば、かゝる微温的な対策では所詮駄目である。

(又)切符制度か

こゝに於て節米を徹底せしめるためにガソリンの如く切符制度を採用し、先づ比較的不急な方面に対する供給を思い切って減ずることゝ人口一人当り消費を厳格に計算し、余裕ある配給を許さないことにすれば消費量の一割程度を節約するのは不可能ではないかも知れぬ。しかし石油などゝ異つて米の生産者は全国農家五百六十万戸の大多数に亘り、且つその米を販売する農民だけでも三百万戸以上に達しているので、この販売を一元的に統制し、さらにこれを計画的に配給するのでなければ切符制度は到底効果の上るものではない。しかもこれを為し得るためには、相当準備期間を要するので応急の間に合い兼ねる。そこで政府の手持米を極力増加しこれによって価格及び配給を統制することによって急に応ずるの外に方法はなく、この際政府手持米増加のためには国庫の損失を覚悟しても、断々乎として徹底的に、これを実行しなければならぬ。だが切符にせよ、配給の問題にせよ、要するに国民各自に徹底した節米の意義が達成しないならば、実質的効果を得られないことを、まづ反省せられねばならぬ。

(ル)国民健康の基礎から

茲に米の時局対策について、大いに反省せねばならぬ問題が別にある。それは農政当局は米という物品にばかりこだわり、厚生当局は人間の保健について精神的問題にばかり、こだわっているということだ。日本国土の人間が、米を主食物とする限り、その摂取分量は、どれだけが適当であるかということは充分調査し研究し得る筈だ。否こうした調査や研究が当局の手になければ、こうした材料を所有するばかりでなく、実際に行っている機関が我々には存在する。よつて国民主食量の適量を指示して適当な精神運動とすることに決して困難ではない。(それは切符制を行つても、従来の摂取量の各人の相違を認めつゝ適量を配給したなら節米の効果はない。)もし切符を千遍一律に発行したならば、国民の空腹感は、国家政策について重大な錯誤を来さしめるに相違ない。こゝに従来の摂取量を低

減せしめ、且つ健康増進への指針が必要なのである。

食物摂取量の基準と、摂取方法の具体的指導の急務が叫ばれてくるのである。前米運動の基準が立てられねばならぬのである。節米運動のイデオロギーがなければならぬのである。もしかゝる本格的な基準なくして、節米運動を為した処で、次年度の凶作(予想)に対処する事は出来まい。われわれは、明年度残り米即ち次年度の繰越米として七百萬石以上、食い残さなかったならば非常な失敗が起ることを断言したい。ゆえに節米運動は、千四百万石以上の基礎の上に立てられねばならない。とすれば、一人当りの食物摂取量の低減は約二斗宛になる。この二斗の食物摂取量の低減を、不平なく、不安なく、且つ国民に空腹感を持たしめず実行せしめずして、何をか節米運動と云い得ようぞ、何をか国民精神総動員運動といふ得ようぞ。

われわれは、今日の国民健康の低下の一半は主食物としての白米の過剰食にあることを反省せしめらるゝ幾多の証拠と材料をもっている。この白米と同じ分量を、七分づき米で摂取したならば、又異った方向に病弱者が続出することを今から予告して憚らない。この米の摂取に対する根本的な誤謬を国民に如何にして反省せしめ得るか、一にその根幹は当局の指導によらねばならない。そしてその具体的方法はわれわれの手許にあるのである。

米の国家管理も行われ、今や必至に国民の協力によって節米国策が行われねばならぬ。節米国策とは、単なる切符制や消費節約強制であってはならぬ。今日の日本人の健康と体位向上には節米こそ最も適當なる機会である節米をして、単なる節米たらしめず、保健と衛生との方向に副うて、国民精神総動員運動たらしめずばなるまい。

米の国家管理を行って種々の方策を立てたとしても、方法の中に国民をして衷心から協力せしめるような道が樹ってなかったならば、規則と形式のみあって、内容の充実せざるものとならざるを得ない。規則と形式だけでも、問題の内容によっては、是を処理したと

いゝ得る場合がある。しかし米の問題に関する限りかゝる一時逃れは絶対に許されない。試行錯誤であっても許されない。米の国家管理に魂を入れるために、節米運動をして真に国民が協力する方向に進ましめたい。その道は実に近きにあるのである。現にその道を実行しつゝある同志は数万を下らないのである。この同志は、一日二合内外の米と、少量の副食物にて、日本人の健康体として、何人にも劣らぬように働いているのである。このわれわれの同志の燈台の如き光りは、いまは小さいかも知れぬ。しかしこの小さい燈台の光りは、全日本人の食料不足をして、食料不足感をもたしめぬのみではなく、従来以上の健康を獲得し、病弱者を救うあらゆる衛生設備にも勝るといふ事実を世に示しているのである。

あとがき

この書は、時局下の国策に順応せねばならぬ国民の覚悟を述べたものである。その覚悟は奇矯なるものでもなければ、実行不可能のことではない。しかし、従来の慣習から云って、生活の新らしい転換に対処するのが困難なのが人間性であるために、兎角斬新な事は行われ難い。

しかしいまは非常時である。非常時には非常時の道が行えなくては、非常時の対応策とはいえない。しかも、われわれが云はんとしていることは、単なる机上論でもなければ、所謂理想論ではなく、実に身をもって行っていることなのである。

まず瑞穂の国の国民のための御教へを一つ披露しよう。是を今日の国民は上の空でできているのである。こんな事では、真の日本人とは云へないではないか。

瑞穂の国の天つ御食

掛まくも畏き……神社の大前に恐み恐みもうさく天つ御食の長御食の遠御食と、新嘗間食さむと為て、天皇の宇豆の大幣帛を捧げ奉らしめ給うが故に、皇神等の成し幸へ給へる八束穂の秋の初穂を御食御酒に仕へ奉りて、山野の物は甘菜辛菜、海川の物は鱸の広物鱸の狭物奥つ藻菜辺に至るまでに、置き足らはして、献奏らくを聞食し宇豆那比給いて、天皇命の大御代を厳御代の足御代と万千秋の長五百秋に平けく安けくいはひ奉り幸い奉り給ひ、親王諸王等を始めて、天の下の国民に至るまで撫で給ひ恵み給ひて、五十檀八桑枝の如く立ち栄へ仕へ奉らしめ給へと、恐み恐みも称辞意へ奉らくともうす。

—新嘗祭祝詞—

豊芦原瑞穂の国に、皇祖の御示しのみまに降り来って健国創業の偉をなし大を遂げたわが日本国民は爾来三千年、皇祖の御教へをひたすら守りつゝ今日の聖代に至りました。

そして歴代天皇を始め奉り国民はつねに、皇祖の教へ賜りし天つ御食を長しへの御食と遠く末つ世まで戴き、年毎にそのとり入れの初穂に山の幸ち、海の幸ちを取りそへてさゝげ奉り皇祖の御稜威と御徳をたゞへ奉って来たのであります。

これはたゞの形ばかりであってはなりません。あくまでも、皇祖の御前に心もなき振舞をしてはなりません。必ずその「たゞえごと」にはまごころを籠め、その「まごころ」は日々の生活の上にあまねく輝かねばなりません。我等の食は「天つ御食」であります。かりそめにも軽々しく思つてはなりません。「神の御食」であります。夢にもおろそかに扱つてはなりません。

代用食だの、人口調節だのと騒ぐ前に私共はこの「天つ御食」の意義を深く深く考うべきであります。深く深く憶念すべきであります。

是を二たび三たび復誦して下さい。

稲作りの正しい方法がすたれて、量のみ追及した農作物が、或いは、国民の腹を充分ふ

くらましたかは判らないが、健康が低下したのは事実だ、この事実を照らして、いまこそ国民の反省を大声叱呼せねばならない。現下の食糧問題は、最もいゝ教へだ。この時局下の米の不安をして、不安でない生活態度を学ばしめねばならない。

われわれが、あさげ、ひるげ、ゆうげを頂くごとに、「頂きます」と云い、すんだあとで、「御ちそうさま」ということは、天地の神に云うことであり、伊勢神宮に申し上げる日本国民の声なのである。この声があればこそ、わが国難に際して、神風のめぐみが起るのである。いそしむ心が天地に満ちてこそ、神風が起るのである。いまこそ米をいそしみ、敬い、そして最大の節約に心を向くべきだ。これこそ真の日本人のつとめである。その節米の道は既に拓けている。日本的節米運動は、今度こそほんとうの国民精神総動員運動の中核とならねばならぬ。そして保健と物資不足と、新東亜建設との三つの問題を解決する一大運動の、根幹とならねばならぬ。(編者)

人は物を食って生きている！正しく食へば健となり、過れば病弱となる。病気が恐ろしければ食い改めればよいのである。

口先ばかりで悔い改めるより、口の中から腹の中まで食い改めよ！病敵は忽ち退散する。身体が健康になれば精神も健全になる。食養とは単なる栄養学でも、医学でもない。生理的な教育であり、修養であり、生命の芸術であり、道徳であり、経済政治であり、宗教でさへある。

—やしなひくさ—